

第17回 Negative Strand RNA Virus (NSV2018) meeting 参加報告

(2018年6月17日～22日, ヴェローナ・イタリア)

山吉誠也

東京大学医科学研究所感染・免疫部門ウイルス感染分野特任准教授

NSV2018 meeting は、1969年に“The biology of large RNA viruses”としてイギリスのケンブリッジにおいて第1回が開催され、その後はだいたい3年に1度、ヨーロッパの歴史ある都市を中心に開催されている。その名の通り、マイナス鎖のRNAをゲノムとしてもつウイルス(インフルエンザウイルス、麻疹ウイルス、パラインフルエンザウイルス、RSウイルス、メタニューモウイルス、狂犬病ウイルス、水泡性口炎ウイルス、ボルナ病ウイルス、エボラウイルス、ハンタウイルス、リフトバレー熱ウイルス、ラッサウイルスなど)を研究対象とする世界中の研究者が、最新の研究結果を発表する場となっている。そのため、日本国内ではあまり研究されていないウイルスの最先端の発表を聞けることが、本学会の醍醐味の1つである。“発表会場は1カ所、招待演者なし”というスタイルとともに、Principal Investigator (PI)による発表とポスドク・学生の発表が混在することで、独特な雰囲気が存在する。前回のイタリア・シエナから北方に移動したイタリア・ヴェローナにて2018年

6月17～22日に開催されたNSV2018 meetingには、欧米を中心に350名以上の参加があった。

今回、「Breaking & Entering」, 「Expressing & Multiplying」, 「Suppressing & Conquering」, 「Building & Escaping」, 「Damaging & Spreading」, 「Fighting & Responding」, 「Emerging & Evolving」という7つのセッションに演題が分類され、口頭発表およびポスター発表が行われた。口頭発表では、ウイルスの増殖に必要な宿主蛋白質の解析、抗ウイルス活性にかかわる宿主蛋白質の解析、ウイルスの病原性の解析、ウイルス蛋白質の機能解析などの基礎的なウイルス学に関する発表が多くみられた。また、クライオ電子顕微鏡による生体分子複合体構造解析や蛍光蛋白質を用いた生体内ライブイメージングなど異分野の最先端技術を取り入れた研究も散見された。これらの発表の多くが、いまだ論文として雑誌に掲載されていない、もしくは掲載予定の未公開な研究内容であり、印象的な発表が多くあった。質疑応答においても、非常に建設的な質

問が多い中でも、ユーモアあふれるやり取りもみられた。また、30～40歳代の欧米系若手女性PIによる発表も多くあり、女性研究者を取り巻く研究環境が日本とは大きく異なることを感じた。日本における女性研究者(教員)を増やそうという試みも、目先の問題を解決するためだけの方策ではなく、根本的な解決策が展開されることを願う。女性研究者が活躍できる研究環境は、すなわち男性研究者にとってもワークライフバランスのとれた生活につながるに違いないのではないだろうか。

実験手技に関しては、宿主蛋白質同定のためのスクリーニングや宿主蛋白質の詳細な機能解析にCRISPR/Cas9 (Clustered Regularly Interspaced Short Palindromic Repeats / CRISPR Associated Proteins 9) システムを用いたゲノム編集による遺伝子破壊が広く用いられていた。2013年に報告されたCRISPR/Cas9システムが、わずか5年後に研究発表の場で幅広く利用されていることを鑑みると、当該システムの研究現場での有用性・利便性が多大であることを証明している。また、